

# 平成28年度第1回秋田県社会教育委員の会議の要旨

- I 日 時 平成28年5月25日(水) 午後1時30分～午後3時30分
- II 場 所 秋田地方総合庁舎 6階 609会議室
- III 出席者 委員：加藤委員(議長) 小池委員(副議長) 今泉委員 稲村委員  
大河委員 大滝委員 佐藤委員 高橋委員  
松田委員
- 事務局：沢屋生涯学習課長 成田副主幹 舘岡主任指導主事  
松橋社会教育主事 柏木社会教育主事 森川社会教育主事

## IV 会議内容

### 1 開 会

### 2 生涯学習課長あいさつ

### 3 議 事

#### (1) 協 議 提言骨子案について

##### 【テーマ】これからの社会教育行政の在り方について

視点1 学校教育・家庭教育・社会教育の更なる連携・協働

視点2 多様な主体(他部局、企業、NPO等)との連携

#### ●視点1について

- ・学校は、コミュニティスクールとして10年目である。学校運営協議員は、学校関係者、企業、主任民生委員、町内会長、地元商店関係者など15名の委員からなる。運営協議会は年4回開催されており、4月の会議で学校運営方針が承認されスタートすることになる。地域が一体となって子どもを育む上で、コーディネーター的役割を果たす地域委員会が存在する。PTAのOB・OGなどが委員となり、月1回開催している。学校のニーズを受けての実動部隊であり、4月の会議後、花壇に植える花の手配や敷地内の整備などを行っている。運動会は、学校・家庭・地域による連携事業であり、地域貢献の一つである。
- ・地域委員会で元PTA会員の方々が学校との関わりを続けているとのことだが、卒業するとなかなか足が向かない学校に、関わりをもってもらう仕組みがあるのは、学校と地域を結ぶ上で重要な役割である。
- ・本市では、学校支援本部が各中学校区に一つずつあるが、それぞれのコーディネーターが、その役割を果たすまでには至っていない。自らが得意とする分野の講師を務めるにとどまっておられ、人をつなぐコーディネーターの役割まではできていない。統括コーディネーターが養成されることによって、地域人材と学校のニーズを結びつけることができる。本市では、社会教育指導員に統括コーディネーターとしての役割を期待していたが、4月で交代となり、新たに担当される指導員に、一から説明をしている段階である。今後、本部設置校の関係者とコーディネーターが集まり、説明会を開催する予定である。そこでは、生涯学習課の一方的な説明ではなく、委員の方とコーディネーターが互いに意見交換する場にしたいと考えている。数回開催しながら、地域のよさや特色を話し合うことで、学習ニーズに応えることに

- もつながりバージョンアップが図られるのではないかと考えている。自分たちの地域に眠っている人材や教材の掘り起こしで、学校区を超えて広がりが生まれるように期待している。
- ・組織づくり・人づくりは重要である。継続のためのバックアップ体制が必要だと感じた。中学校区ごとのヨコの連携も進めていく必要がある。
  - ・コーディネーターに関して、大学時代いろいろ活動した経験があるが、学校に関わることはハードルが高いと感じる。県の現状はどうか分からないが、正式な立場でなくても、大学生が支援する立場に回れないか。地元の人ではないという意識が地域の人にもあるのではないかと思う。学生には地元の人になってほしい。子どもたちにとっては、様々な年代の人との関わりが大事であり、年齢の近い大学生が関わる余地はある。地域間交流があると、人材バンクのことや子どものことなど、共有できることが出てきて、それぞれの地域で生かせると思う。
  - ・大学生に行けと言っても難しいところもあり、大学では、授業として活動を用意している。しかし、その後継続してやっていくことには難しさがある。教員を目指す学生が、打算的ではあるが、ボランティア活動がプラスになると考え、取組を進めている。
  - ・チャレンジデーにおいて、本市では今までとは変えて、大人だけが先生ではない！という視点で保育園児100名から地域の大人がダンスを学ぶという取組を行った。地域の大人が涙を流して喜んだ。この取組を踏まえ大人だけが常に指導者だという視点を変えていきたい。学ぶ機会を創ろうと、保育園の子どもたちの学びの成果をステージで発表してもらった。来年は小学生にもお願いしたい。これも仕組みづくりの一つだと考えている。高齢化が進んでいるので、高齢者の元気をいかに地域で生み出すかが重要と考えている。学校支援本部事業も同様で、全ての学校にコーディネーターを置き、多いところでは5名、計36名程いる。役割はいずれ、企業・民間・地域の人たちが関われる形へと考えている。学びたい、情報がほしいという方が多い。文科省初等中等教育局参事官付参事官補佐の廣田貢先生をお迎えして、地域の方々や社会教育関係者等でワークショップを行った。地域の子どもたちをどのような子どもに育てたいかというテーマで行った。課題解決に向けてこれからも頑張っていきたい。常にベクトルを同じ方向にして、意識改革を進めたい。地域だけではなく、学校側にも働きかけていきたい。ふれあいプラザが新たにできたこともあり、それを拠点に取組をいろいろと進めたい。
  - ・本市は早くから学校支援本部事業に取り組んでおり、充実している。プロセスの中で、どのように関わってきたのか。
  - ・コーディネーターに公民館長が入っている。非常勤の立場だが、地域人材を理解している方たちであるからこそ、スムーズに学校のニーズに対応できている。そこから、その他のコーディネーターに波及している。市が一つにつながっていく方向をイメージしている。
  - ・本市はその逆で、現状に満足しているところがある。県や事務所との意見交換会があっても忙しくて行けないという方が多い。年配の方も多いが、頑張っていたきたい世代だ。いかに有効に視野を拡げてもらう機会にしていくかが課題となっている。アプローチはするが、まだ結果に結びついておらず、今年度こそは！という思いである。公民館長さんが入るといのは良いアイデアであり、持ち帰りたい。
  - ・会議に出席する度に、いろいろな方々の活躍を聞いて、持ち帰って検討するようになっている。皆さんから話を聞いて役立つことが多くありがたい。公民館長さんの話があったが、村でも地域づくりの団体の会議で、本部事業とは別だが、学校のニーズや地域の力への期待を話してきた。しかし、今年から私自身が参加できなくなり、機会がなくなり困っている。本部に関わってから長くなり、存在が忘れ去られている感じもある。全戸にボランティア募集のチラシを配布することに加え、併せてボランティアの活躍の様子を伝えようと動いているところである。新しい人が入るのはなかなか抵抗感があることだが、大人になってからでは

なく、学生時代から関わることで、忙しい時期は難しくてもやがて関わるができるときに生きてくるので体験させてあげたい。村でもチャレンジデーをやっているが、バラバラにやっている。保育園と祖父母と地域は、それぞれに結びつきやすい関係だが、村に高校がないこともあり、チャレンジデーでは高校生の参加は望めない。そのため、活動に参加できるのは保育園が鍵を握ることになる。

- ・保育園が参加すると社会福祉協議会にも関わってもらえる。中学生もボランティアとして関わることができる。
- ・ニーズがあっても忘れられるという話だが、人材バンクのようなものを進める留意点は何か。
- ・情報は日々更新されていく。人の中に蓄積されていく人材が大切である。知識・経験の中にリストがあるイメージであり、後は、コーディネーターの意識や人と人とのつながりが大切になってくる。
- ・人材バンクはあるが、使われていないのが現状である。コーディネーターの成長に期待している。
- ・コーディネーターの件だが、本市では24全ての小・中学校がコミュニティスクールである。問題となっているのは、管外の先生方の意識が乏しく一から始めなければならないところで、地元の教員との温度差が生じている。地域と学校・家庭・行政による会議は頻繁に行われている。本部事業で39名、放課後子ども教室で15名、運営協議会で24名いるが、それぞれがバラバラに動くのではなく、やはり統括する人が必要だと考えている。委託事業で、首長部局と協働で進める連携事業に取り組んでいる。「協働コーディネーター」という名称で、学校と地域を結ぶ役割をお願いしている。子どもたちが地域に対してどのような関心を持っているのか、地域関心度調査を行った結果、思ったより関心度は高くない。それはなぜか。情報が乏しいからかもしれない。それが要因かもしれないということで、学校と各地域にある公民館に掲示板を双方向で作成した。その他、運営本部の中に予算化して、「コミスクだより」を全戸に配布している。公民館行事カレンダーを作成し配布している。せっかくできたルールなので、統括コーディネーターの役割も担える人材に育ててほしいと考えている。公民館GPでは、学校・地域が一体となった公民館活動の在り方を考え取り組んだが、今後も進めていきたいと考えている。チャレンジデーでは、100mにわたって地域の人たちと一緒に踊ろう！という事業に取り組んだ。今年は市民88%の参加率が目標となっている。
- ・実態調査に基づいた先進的な取組ができている。
- ・チャレンジデーでは、小・中合同でラジオ体操を行った。町立図書館が文科表彰を受けたが、私もボランティアとして関わっており、嬉しく思っている。行政には、もっと地域の人に任せてほしいとお願いしている。私たちが入っていくことでできることがある。学校支援地域本部では花植えやミシン指導、昼休み見守りなどのボランティアを行っている。学校には、その活動のための部屋を用意してもらっている。今、統括コーディネーターの役割をしている方は、町の職員である。今後のことを考えれば、地域の方にバトンタッチする必要がある。学びによる町づくり、地域活動など統括してできるようになれば、いろいろな力、眠っている人材が活用できるのではないかと考える。保育園2園、小・中学校1校、高校1校と、取り組みやすい地域でもある。若い人の関わりが話題になったが、昨年度から地域戦略会議などに呼ばれることもあり、私が一番若い状態だ。今の学生たちは町のことを考え学んでいる世代であり、将来を描く取組もやっているのだから、町民もそれを聞いたり、町の事業に生かしたらいいと思う。若い人たちはどうせ出て行く人とは思わずに、帰って来られるような取組にしなくてはならない。
- ・地域の方がいつでも行ける場所があるのは大きい。課題として眠っている人を掘り起こしていくことは大事である。
- ・今までの各委員からの話は参考になることがたくさんあった。PTAのOB・OGを、何ら

かの形で学校に関わらせたいものである。しかし、なかなか受け皿がない。学校後援会、地域応援団のような組織を私たちが創ってもいいのではないかと感じた。それは地域に入っていくチャンスになる。層の厚さにもなる。地域は人材宝庫だと考えている。私の住む地区は、誕生40～50年経つ団地であり、私はここに住んで20年程になる。誕生の頃に若かった人たちが今は先頭に立っていて、「俺たちが創った町」という意識が高い世代になっている。確かに世代間のギャップはあるが、話を聞くこと、関係をもつことが必要だと思っている。地域の歴史、雰囲気大切にしたい。小学校では、生活等の支援で秋田大学に依頼し快諾を得て、支援をお手伝いいただいた。PTAからは、バス代金程度だったが、大学生にとっては経験になったようだ。真ん中にコーディネートしてくれる人がいればより繋がりやすいと思う。仕組みづくりが必要である。学校と家庭と地域、社会がともに何かやる時は、必ず誰か先に動く人がいないと進まない。そうした人材も、社会教育の中でつくっていかなければならない。

## ●視点2について

- ・多様な主体ということで、社会との関わりが深い団体との連携についてご意見を伺いたい。
- ・前回も話したが、山形市は仙台市が近いことや、地域の特色・違いが大きく、秋田よりも人的交流が圧倒的に多い。県の垣根を越えている。由利本荘市と酒田市との文化の共通項を鍵に、交流事業を実験的にやってみるのもよいのではないかと考える。1時間半ぐらいで県を超えることができ、交流も容易である。県のくくり、市町村のくくりを外してみてもどうか。他県とのつながりを意識してみることも考えてみてはどうか。
- ・狭い地域ではあるが、秋田内陸縦貫鉄道を使い、県北の高校と県南の高校で交流し、料理コンクールをやったことがある。高校生がもつ課題意識を知る良い機会であった。当日は車両が超満員で、その中でワンプレートを振る舞うという内容だったが、高校生の力を地域に生かすことができた取組の一つだ。三重県の高校とも交流も行っている。お互いに地域課題を考える機会となっている。また、秋田大学分校の協力も得ている。18歳選挙権とも関わってくるが、高校生の意見を引き出せる、真剣に意見を交わす機会を増やさなければならないと強く考えている。もっと積極的に秋田県が動こうとすればできるのではないかと。高校生の書道パフォーマンスも5回ほどを数える。高校生のパワーをもっと拡げていく機会にしたい。予算との戦いで思うようにいかないところもあるが、若い人、NPOの力を社会教育の力で進めたい。
- ・ついこの間までは、高校生も働き手の一人だった。アルバイトも盛んで、活躍の場は多かった。それが、いつの間にか社会との関わりが少なくなっているように思う。高校時代の取組が豊かであれば、例えば県外に進学したとしても、秋田で就職を考える子もいるのではないかと。実際に、コンビニと高校生とのタイアップなど、取組もいろいろとある。
- ・今も昔も高校には広範囲から学生が通ってきている。しかし、今は、昔に比べて地域の除雪ボランティアや防災活動など、地域との関わりを持つ学校が増えている印象である。そうしたことがクローズアップされることも多く、私は高校生が頑張っているなという印象をもっている。本市の「子どもハローワーク」を紹介したい。小・中・高と大事に育てた子どもが、いかに地域を支える人材になり得るかを考えて、学校でも地域その人材の育成を目指し取り組んでいる。医師、教師、企業人など、多くの職業に触れ、地域の一員として働く人材になることを子どもたちに期待している。募集は学校に定期的に来ており、その都度子どもたちに紹介している。学校では、子どもたちの興味・関心をひくような工夫をしている。子どもたちは様々な職業にチャレンジし、その経験をキャリアパスポートに書き込み、小・中・高と積み重ねていける仕組みだ。この取組が評価され、昨年度は博報賞をいただいた。
- ・積み重ねが将来の職業のきっかけになる。農業団体に中学生が体験に出掛けた話を聞いたが、

アスパラの作業だったそうだ。帰りにアスパラをプレゼントにいただいたという。子どもたちは対価として喜びを感じただろう。体験+αがあれば、将来を意識するようになる。今は、企業がいろいろと社会貢献に積極的である。企業と学校を結び付けうる方策、事例はあるものだろうか。

- ・企業については、第三次推進計画の中で、関係性の重要性を謳っているが、実際には特に動いていない状況である。NPO法人等との関わりであれば、民間団体と話す機会があり、オフサイトミーティングに参加した時、高校生との関わりによる取組の重要性を伺った。学校との関わりをもてていなかったと考え、団体に提案したところ、好感触だったが、高校は県の管轄であることもあり、障害の部分だけを気にするようになり進まなかった。入り込めないでいる。継続していこうとは考えている。高校生が地域課題を企画段階から出していける仕組みについて明文化してもらえないか。
- ・高校生との関わりについて、悩みはまだある。地域と関わることで、学力が向上し、地域との関わり方が変わったという実例がすでに全国にはある。八戸と三沢ではすでに始まっている。こうしてクリアした学校があり、高校生、地域、民間が連携した取組を進めている。志のある行政マンはいる。高校でキャリア教育が途絶えないようにしたい。年間計画も含めて考えていかず、そこが改善点だ。高校・大学が変われば、秋田は明るくなると信じている。思いを共有してくれる人が増えていけばよいと考えている。
- ・小・中学校の連携はしっかりできているので、同じ学区にある高校との連携も今後は進めていきたい。
- ・高校は変わらなければならない、大学も変わらなければならない。ターゲットをしぼって、やっていくしかない。
- ・医師と教員は地元から出したいと考えている市もある。地元で貢献できる人材を市で育てるという意識で取り組んでいる。
- ・今年度まで社会教育主事認定講習を秋田大学で行う。来年度からカリキュラムが大きく変わる。今年、ぜひたくさんの方に社会教育主事資格を秋田で取ってほしいと思う。資格を持たない人が入ってはいけないと躊躇するのではなく、地域の人が入っていけるつながりを社会教育主事がコーディネートすることが重要になる。大学では、地域貢献に特化したカリキュラムをもつ学科もある。声を掛けをいただきたい。地元で就職したいという学生は多い。雇用がないという点は本県の大きな課題である。ブランクがあっても秋田で就職したいと考えても、なかなか採用がない状況が問題である。連携という点においては、産業振興も欠かせない。

## (2) その他

- ・10のヒントの紹介
- ・若者塾の紹介

## 4 その他（今後の予定について）

## 5 閉 会（沢屋生涯学習課長あいさつ）